入院が長引く可能性がある女性疾病である切迫早産について知っておこう！）

1、切迫早産とは

早産（妊娠22週0日から35週6日の出産）となる危険性が高いと考えられる状態、つまり早産の一歩手前の状態のことをいいます。子宮収縮（お腹のはりや痛み）が規則的かつ頻回におこり、子宮の出口（子宮口）が開き、赤ちゃんが出てきそうな状態のことです。破水が先に起きたり、同時に起きたりすることもあります。羊水が出続ければ陣痛が起きたり、細菌に感染したり、羊水の量が減ることで赤ちゃんが圧迫されたりといったことが問題になります。

２、原因

・感染症　・子宮の異常　・妊娠高血圧症候群　・心臓病／肝臓病の合併症　・多胎妊娠
・羊水過多／過少　・疲労　・ストレス　・冷え

３、切迫早産の治療

切迫早産と診断された場合は、できるだけ長く胎児を子宮内に留めておくために、安静が必要です。
子宮口が開かないようにするために、子宮収縮を抑える目的で子宮収縮抑制薬（はりどめ）を使用することがあります。また、切迫早産の原因の一つでもある細菌による感染が疑われれば抗菌薬を使用することもあります。
子宮収縮の程度が軽く、子宮口があまり開いていない場合は外来通院による治療でもいいのですが、子宮収縮が強く認められ、子宮口の開大が進んでいる状態では、入院して子宮収縮抑制薬の点滴治療を考慮します。生まれた後の赤ちゃんの状態をよくするために、ステロイドという薬をお母さんの体に使うことがあります。
また、症状がなく子宮口が開きやすい状態を子宮頸管無力症といいます。どんどん子宮口が開き、流産や早産になるので状況により頸管（子宮の出口）をしばることがあります。これを子宮頸管縫縮術といいます。

４、自宅安静となるケース

比較的症状が軽い場合は、ウテメリンやリトドリンなどの張り止めの薬を服用しながら、自宅にて安静に過ごすように指示されます。入院しなくてもいいとはいえ、普通に家事をしたり、買い物に行ったりは厳禁です。基本的には、ほとんどを自宅のベッドで寝て過ごすことになります。

５、入院となるケース

切迫早産の約30～50％は入院管理を行っても早産に進行するとされていますが、できるか

ぎり妊娠週数を伸ばすことが重要になります。
入院中は、基本的にできるだけベッドの上から動かず、身の回りのことも家族や看護師さんに手伝ってもらうことになります。ウテメリンなどの子宮収縮抑制薬や抗菌薬を投与しながら穏やかに過ごします。**点滴は 24 時間ずっとする必要があるため、入院が必要**となります。
破水してしまっている場合でも、妊娠週数が短ければ短いほど、できるだけ長く赤ちゃんを子宮内で成長させる必要があるため、管理入院になります。

切迫早産で入院する場合、いつまで入院することになるのかは個人差があります。症状が軽く、子宮収縮を抑える薬の内服や点滴などで早産の兆候がおさまれば 5〜7 日ほどで退院できることもあります。しかし、**多くの人は子宮頸管が短いか、子宮口が開いているために退院できず、正期産の時期（妊娠 37 週〜）まで入院**することになります。
入院期間が切迫早産の入院期間は、2〜3 か月になる事が多く、**長期入院なることも少なくありません**。

6、入院のメリット
・十分に休める　・バランスの取れた食生活　・体調の変化に即座に対応できる。

7、切迫早産での入院の体験談
入院安静になってしまうと、赤ちゃんを産むまで退院できないことが多いです。
そして、点滴を打ち、トイレ、食事、シャワー以外はすべてベッドで横になって安静を保ちます。重症度によっては、シャワーも入れず濡れタオルでの清拭になります。
1 か月以上の長期入院になることも多いので、退屈と不安、点滴の差し替えなど我慢しないといけないことが多くなります。